

【祈祷会奨励】「捕囚から解放されるイスラエル」 エズラ記1章、ウ信仰告白5:5 (7/6)

ヨシュア記、士師記、ルツ記と読み終わりました。続くサムエル・列王記・歴代誌は読み飛ばし、エズラ記を読むこととしました。捕囚から解放され、約束のメシアにつながる時代を確認することにより、聖書全体の理解を深めることを優先したためです。

イスラエルは、王が立てられ王国となりましたが、ソロモンの時代に南北に分裂し、北イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされ(BC722)、南ユダ王国はバビロンに滅ぼされ(BC586)、イスラエルの人々の多くは、バビロンに捕囚の民として連れて行かれました。これらは、国力が弱かった結果ではなく、イスラエルが主なる神を信じることなく、信仰から離れ偶像崇拜を行ったように、イスラエルの民が主に罪を犯した結果でした。

しかし主なる神は、イスラエルが、いくら罪を犯し、その結果裁かれたとしても、そのままにされるお方ではありません。捕囚前に、バビロンからイスラエルを救い出す約束をお語りくださっていました(エレミヤ29:10)。エレミヤが預言者として働いたのは、バビロンによって南ユダ王国が滅ぼされていく頃であり、主の言葉は、預言として、イスラエルの将来について語られていました。それがキュロスの命令により実現します(BC538)。

ウェストミンスター信仰告白は摂理についてから告白しています(5:5)。主なる神は、摂理において、すべての民を支配しておられます。ですから、私たちが旧約聖書を読む時、つねに主なる神が御支配されており、アブラハムによって始まったイスラエルがどこに向かっているのかということを考えながら読まなければなりません。つまり、イスラエルは罪を繰り返します。主はその度にイスラエルの民を裁かれますが、それでもなお主はイスラエルの民を愛され、悔い改め、主に慕うイスラエルに恵みをお与えくださいます。そして、約束されたメシアであるキリストが与えられることにすべてが向かっています。ですからバビロン捕囚における70年という年月も、主がイスラエルを愛するが故に、遡り、主への信仰を取り戻すための期間としてお与えになられたのです。

主なる神は、ペルシアの王キュロスを用いになります。主なる神の支配は、イスラエル・神の民、そして私たちキリスト者だけではなく、異教徒や裁かれ滅びていく人をもおよんでいます。主の預言はキュロスという名を挙げて、捕囚からの解放を預言されました(イザヤ45:1-3)。主なる神が、キュロスという名まで、捕囚の前から定めておられたのか、それとも、イスラエルが解放される直前に預言されたのか、聖書解釈の問題がありますが、ここでは深入りしません。

大切なことは、主なる神が異邦人であるペルシャの王キュロスを用いて、バビロンを滅ぼし、そしてイスラエルを解放してくださることです。エズラ記1:1は、この主の預言が、キュロスにより実現したことを語ります。

そして、ペルシャの王キュロスは主の御名により命令をくだします(1:2-4)。キュロスは、ペルシャの王として、自分たちの神に仕えていました。にもかかわらず、ここでは「天にいます神」、「主」と語り、主なる神の御力の下で、命令を発することを語ります。

主なる神の支配は、キュロスに直接働きかけ、そして、主の御名において、命令を発します。このときも、キュロス王の名によって、命令を発するのであり、「名」は大切です。そのキュロスが、「主により」命令を発するということは、キュロス王もまた、主なる神の御支配の下にあることを明らかにしています。

私たちは、主なる神の御力が、聖書の中、主なる神を信じているキリスト者の中にだけ働かれるように思うこともあります。しかし主なる神の御支配は、天地万物が創造された時から、主イエスが来臨され十字架の御業を成し遂げた時まで、さらに新約の今の私たちにまで及んでいます。主なる神の支配から離れた所で、誰一人生きることはできません。

そのため最後の審判において、主なる神は、すべての人に対して裁きを行うことが可能です。主なる神を知り・受け入れ・信じた者には、キリストの十字架の御業の故に罪の赦しを宣言し、神の子として天に迎え入れてくださいます。その一方、主に逆らい・主を信じることをしなかった者には、その人自身の罪の行為により、裁かれ、滅びが示されます。私たちは今も、主なる神の御支配・御力の下で命が与えられ、神の恵みに生かされていることを、忘れてはなりません。

バビロン捕囚となったイスラエルの民でしたが、主なる神がペルシャの王キュロスを遣わすことにより、イスラエルの民は解放され、エルサレムに帰還することが許されました。

2章では、バビロンから帰還した人々のリストが記されています。これは、バビロンからの第一次帰還であり、ネヘミヤ記7章にも、ほぼ同様のリストが記されています。またエズラ記8章にはエズラと共に帰還した人々のリスト（第二次帰還）が記されています。

イスラエルの民には、都エルサレムに帰還することが、アイデンティティが与えられていました。ですから、自分たちがイスラエルのどこの部族に属しているかを、親から子に、子から孫に語り継ぎました。しかし捕囚の民となり約70年、2～3世代と経つことにより、自分たちがどこの部族に属するのか分からない人たちがいました(59-62)。イスラエルにとって大切なことは、捕囚となっても、自分たちがイスラエルに属する者として、信仰と家系を受け継ぐことであり、ここで帰還した人々はこうした信仰を受け継いできた人々です。

バビロン捕囚のイスラエルの民は、バビロンで自分の生活を築き、安住していた人たちが少なからずいました。また帰還するエルサレムは、帰ってから神殿の再建することが求められていますが、自分たちの住まいも一から築き直さなければなりません。ですから帰還した人々は今までの生活を捨て、困難を覚悟の上で帰還したのです。ですから、イスラエルの民の中には、エルサレムに帰還せず、バビロンに残った人たちもいました。

つまり主の導きに従い約束の地に帰還することは、困難をも身に受ける覚悟をもったの帰還です。その帰還した者たちの名がここで記されています。つまりここで記されている民は、信仰を受け継ぎ、主なる神の恵みに満たされた人々のリストです。

ウェストミンスター信仰告白第12章では「子とすることについて」が告白されています。主なる神は、神の民として救ってくださる神の民を教会へとお集めくださり、罪を悔い改めて、神を信じる者へと導いてくださいます。そして「神の子たちの数に入れられ、神の御名をその上に記されて」います。ここで、約束の地エルサレムに帰還した人たちの名が書き残されているのは、まさに主なる神の御声に聞き従い、現実にはエルサレムにおける生活を再建し、同時に神殿を再建するという大きな働きを担ったことを意味しています。そして神の子たちは、最後のとき、贖いの日のために証印され、永遠の救いの相続人として、もろもろの約束を受け継ぐ者とされています。聖書において、こうしたリスト、あるいは系図が記されているのは、まさに神の民である者たちを、主なる神が確認して下さり、神の民としての祝福に満たして下さっている結果です。

現在に生きる私たちキリスト者も、神の民として、天国における神の民の名簿に、その名が書き記されています。そして私たちの額には、神の民としての刻印が記されており、最後の審判においても天国に受け入れられます。だからこそ地上の教会においても、教会員名簿を大切に管理することが求められています。死去したから、別帳になった、転出・転会されたからといって、名簿を破棄することはなく、ここに教会がある限り、名簿があり、一人ひとりの名が残されています。

私たちがクリスチャンとして生きるとき、「礼拝に出席しなければならない」、「奉仕しなければならない」、「クリスチャンらしく生きなければならない」という圧力を感じておられる方もいます。しかしそうではありません。あなたが信仰を告白して、神の民として受け入れられたことは、もう天国にあなたの名が記されており、救いは確定しています。だからこそ私たちは、安心して信仰生活を送ることができるのです。

そしてエルサレムに帰還したイスラエルの民は、まさに神の民として、第一に神殿再建のために動きます(68-69)。自らの居住地に関しては、その後のことです(70)。ここに神の民として、信仰に生きる者の姿が明らかになります。

ここで書き記されている人々のほとんどの人たちがどのような人たちであったか、私たちは知ることはできません。しかし、名が書き記されていることにより、かれらこそが、神の民として、主の御声に聞き従いエルサレムに帰還した民であることを、私たちは、このリストにおいて確認することが許されています。そして現在に生きる私たちも、天国におけるリストに名が書き記されていることを、お覚えいただきたいと思えます。

バビロンにおいて捕囚の民であったイスラエルは解放され、エルサレムに帰還しました。2章では、帰還した民はまず神殿の再建のために献げ物をささげたことを確認しました。

イスラエルの民は、年に三度祭りのために一つに集まるように求められていました(出エジプト23:14)。それは過越祭(新年)＋除酵祭(種なしパンの祭り)、七週祭、仮庵祭(収穫祭)(第七の月の祭り(出23:14-17, 34:23, 申16:16))です。

イスラエルの民はこのとき、第七の月の祭り、仮庵祭を行います(4)。通常ですと、収穫祭として一年の作物の収穫に感謝して神を礼拝します。つまり主なる神は、出エジプトを果たした時だけイスラエルと共にいてくださったのではなく、その後、毎年、食物の収穫が与えられることにより、主の養いと加護にあることを感謝して祭りを行っていました。

このときイスラエルの民は、無事にエルサレムに帰還したことを感謝しつつ、祭りを行っていたのであり、このことは同時に、主なる神によって、今後の生活も継続的に養いがあり、守られていくことを願いながら、祭りを行っていると良いかと思えます。

「その地の住民に恐れを抱きながら」(3)とも語られており、バビロン捕囚の前からこの地に住んでいた原住民、もしくは捕囚後にバビロンから移り住んでいた人たちもいたかもしれません。イスラエルはこうした異邦人を恐れつつ、主が、イスラエルの民を守り、導いてくださることを、信じて、祈りつつ、祭りを行っていたのではないかと思えます。

聖書は「民はエルサレムに集まって一人の人のようになった」と語ります(1)。一人の人のようになること、これはコピー人間のように皆が同じような人間になることではありません。個性があり、能力差があり、それぞれの個人が尊重されなければなりません。差別が行われてはなりません。日本では「同調圧力」が求められますが、そういうことでもありません。力において支配して一つにしようとするとき、一人ひとり個性を潜めなければなりません。正直なところ、上に立つ者は、この方が支配は楽かと思えます。しかし、この場合、真に一つになり、同じ思いをもって活動することはできません。

パウロは多様性を認めつつ、キリストの結ばれて一つの体を形づくるように求めています(ローマ12:4-8)。つまり、一人の人のようになるとは、旧約のイスラエルの民にとっては、約束の地・嗣業の土地を得ること、救いの約束を確認することであり、新約に生きる私たちからすれば、キリストに結ばれていること・キリストの十字架による救いに与ることを共に確認することです。主なる神の支配に生きること、キリストの十字架の贖いに感謝すること、主なる神による救いと神の国の希望に生きること、このことにおいて一つになり、一致を保つことが求められています。

そして教会が一つになるために必要なことは、主による救いにあることを受け入れつつ、律法に書き記されているとおりに行うことです。旧約のイスラエルの民にとっては、主なる神がアブラハムにお与えくださった祝福が与えられることを信じ、示された3つの祭りを毎年行うこと、生け贄を献げることが中心でした。新約に生きる私たちキリスト者としては、キリストの再臨と最後の審判によって与えられる神の国に希望を持ちつつ、御言葉の説教、洗礼と聖餐の聖礼典を守ること、祈りを献げることが、行われていくことです。

それは形を整え・行うことが大切なのではなく、キリストの十字架の贖いにより罪が赦されたこと、神の民とされていること、神の国の約束に希望を持って生きること、この本質を見失わないことです。こうして、皆が一つの思いとなるとき、教会が一つとなり、福音が前進していくこととなります。

そして、帰還したイスラエルの民は、神殿を再建するために動き始めます(10~13)。主を礼拝する神殿を再建するには、まだまだ困難が待っているわけですが、しかし彼らは、主を賛美し大きな叫び声をあげることができました。まさにイスラエルの民は、一人の人のようになったことにより、エルサレムの再建を目指します。私たちは今、主なる神を礼拝する教会堂に集められ、共に礼拝を献げ、集会を行うことが許されています。キリストの十字架の贖いの故に罪が赦され、救いにあること、神の民としての神の御国における永遠の生命の祝福にあることを、感謝し、喜びをもって、賛美することが許されています。私たちも心一つにして主を賛美、御言葉の養いに与っていくことが許されます。

捕囚の民とされていたイスラエルの民が、約束の地エルサレムに帰還し、いよいよ神殿を再建することを確認しました。このとき、彼らは「民はエルサレムに集まって一人の人のようになった」(3:1)と語られており、信仰の一致を保っていたことを確認しました。

バビロンに連れて行かれていたのは、南王国、つまりユダ族・ベニヤミン族(＋レビ族)でした。このことを理解することにより、4:1を理解することができ、ユダとベニヤミンの敵が、旧北王国の住民であるペリシテ人であることがわかります。

イスラエルの人たちは彼らの神殿建設を手伝うとの申し出を断ります。それは「民は一人の人のようになっていた」からです。なぜならペリシテ人たちはカナンの宗教を崇拝し、イスラエルに偶像崇拝を持ち込んでおり、偶像が持ち込まれる可能性があったからです。

ペリシテ人は、ここで自分たちの信仰を顧み、悔い改めが求められたのですが、それができず、かえってイスラエル人の工事を邪魔し、工事を中断させるにいたります(4-5)。

ここで時代を確認しなければならないのですが、キュロス王の在位はBC538～530、次は聖書には記されていませんが、カンビュセス王(BC530～522)がおり、その次にダレイオス王です(BC522～486)。さらに普通に読んでいけば理解できないのですが、6～23節は後のことを挿入しており、別の時代のことが記されています。そのため、ここで24節を確認しなければなりません。つまり、サマリア人たちの邪魔で工事だ中断したのは、工事が始まったBC537に始まり、ダレイオスの治世の第二年(BC521)であり、16年にわたって工事を邪魔され、中断することとなりました。

6～23節には、6章において神殿が完成した後のことが挿入して記されています。ちゃんと整理して読まなければ理解することはできません(下記年表参照)。おそらく、神の民以外の妨害により工事を中断させられる、という共通のテーマを、一つのところで記すことにより、一つのテーマとして理解することを求めているのだと私は思っています。

クセルクセスの治世(6)、そしてアルタクセルクセスの時代に(7)、それぞれペルシャの王に対して書簡が送られます。これは、ペリシテ人がイスラエルの民が神殿を再建するのを邪魔するために、あらゆる手段を用い、繰り返し行っていた結果であると考えられます。

私たちが主なる神を信じ、主による罪の赦しと救いの喜びに生きようとするとき、私たちの信仰の邪魔をする者たちがおり、そしてその結果・迫害・戦争・誘惑等様々な形で、私たちの信仰を揺さぶりにかかる勢力があるのです。イスラエルの人たちは、一人の人のようになり、こうした攻撃・誘惑が襲ってきても、信仰を貫き、神殿を完成させることができました(5～6章)。私たちも一人の人のようになる信仰の一致を保つことにより、悪の誘惑と戦うことが求められています(参照：ウエストミンスター信仰告白14:3)。

私たちが救われたのは、キリストが私たちに代わって十字架で苦しまれ、死を遂げられることにより、私たちの罪の贖いを成し遂げてくださったからです。そしてキリストの勝利は、キリストが再臨され、最後の審判を成し遂げることにより完成します。最後の審判により、すべての罪・サタンが完全に滅ぼされ、神の民とされたキリスト者の罪は完全に贖われ、神の子として、神の国に入れられ、永遠の祝福に満たされます。そのためキリスト者の地上の歩みは、罪・サタンとの戦いを避けて通ることができず、誘惑・試練・迫害・様々な艱難を避けて通ることができません。それでもなお、私たちが信仰の歩みを続けて行くことができるのは、主による救いが確定しており、主の契約は破棄されることがないからです。主による救いに感謝して、誘惑・試練・迫害・艱難があったとしても、信仰の歩みを続けて行くことができるように、主に委ねた信仰生活を続けて行きたいものです。

【ペルシャ王】

キュロス (BC538～530)
 カンビュセス (BC530～522)
 ダレイオス (BC522～486)
 クセルクセス (BC486～465)
 アルタクセルクセス (BC465～424)

【エズラ記】

1:1 キュロスの勅令 キュロスの第一年 BC538
 3:8 神殿建設の開始 同 第二年 BC537
 4:5 工事中断 キュロス～ダレイオスの治世(4:24)
挿入 4:6 告訴状 クセルクセルの治世(BC486～465)
 4:7～23 工事中断 アルタクセルクセスの命令
 4:24 ダレイオスの治世第二年 (BC521) 5～6章

【祈祷会奨励】「神の御声に聞き従う」 エズラ記5・6章、ウ大教理問160 (8/3)

バビロンによって滅ぼされて、捕囚の民とされていたイスラエルの民は、約70年の年月を経て、ペルシャの王キュロスにより解放され、エルサレムに帰還し、一人の人のようになり、神殿の再建を始めました(3:1)。しかし、サマリア化した人々、異邦人たちにより、繰り返し攻撃され、そして工事を中断せざるを得なくなっていました。

そうした中で主なる神は、二人の預言者をエルサレムに遣わします。ハガイとゼカリヤです。二人が記した預言書は12小預言書において残されています。彼らは主なる神によって遣わされ、主なる神の名によって、エルサレムにいるユダの人々に語りかけます。

主による救いに与り、信仰によって一つとなりエルサレムに帰還していたユダの人々は、神の名によって語られた預言により力が与えられます。このとき指導者として働いていたゼルバベルとイエシュアは立ち上がり、そして改めて一つの思いとなって、神殿建築を再開します(2)。彼らは預言者をとおして語られる主の御言葉を、「〔第三に〕真理は、神の言葉として、信仰・愛・謙遜・素直さをもって受け入れること、…そして〔第六に〕生活の中でその実を結ばせること」を行ったのです(ウ大教理問160)。

そうした中、ペルシャの王によって遣わされたユーフラテス西方の総督タテナイとシェタル・ボゼナイらは、神殿再建に対して異議を申し出ます。つまり、主の御言葉・御声に聞き従って信仰を貫く時、時として為政者や地域の人々から反感を買うこともあります。このときにキリスト者はどうするのか？ 主の御声の正当性を聖書によって吟味して、いつでも弁論・告白できるようにした上で、御声に聞き従うことが求められます。そして、ユダの人々は、主なる神が共におられ、神の目がユダの長老たちの上に注がれていたため、主の御声に聞き従い、反対者たちを恐れることなく、神殿建築を継続することとなります。

ユーフラテス西方の総督タテナイとシェタル・ボゼナイは、ペルシャの王ダレイオスに対して書簡を送り、神殿再建工事が王の命令に反して行われていないか、確認を求めます。手紙に記された内容は、キュロス王の治世の第一年に、捕囚の民であったイスラエルの民が帰還が許されたこと、そして神殿の再建をキュロス王が命令されたことです。

このときペルシャの王であるダレイオスは、キュロス王の命令を確認し、イスラエルの人々が神殿を再建することを認め、公的に工事の再開されます。

さらにペルシャの王ダレイオスは、ユーフラテス西方の長官タテナイとシェタル・ボゼナイたちに対して、神殿再建工事に対して「干渉をやめて神殿の工事をさせること」、神殿を建てるために、「あなたがたがそのユダの長老たちを援助すること」、税金を用いること、神殿礼拝のために必要なものを整えること等を命じます。

主なる神が、イスラエルと共にいて働かれるとき、ただ工事を再開するだけではなく、ペルシャの王ダレイオス、さらには反対者たちにも主なる神の御力は働き、そして主が御言葉をもって命令されたことが実現することとなります。そして、「この神殿は、ダレイオス王の治世第六年のアダル月の二十三日に完成し」(6:15)ます。つまりエルサレムの神殿は、その後の4年間で工事が完成したことを聖書は語ります(参照：4:24)。

現代に生きる私たちにとって、主なる神の御心を確認し、心一つにして、目標に向かって歩むことは慎重さが求められます。教会においてビジョン・目標を持つことは大切だと思います。それが共通の祈りの課題となり、一つの方向を向いて歩み続けなければなりません。このとき教会全体が一つの思いとなって祈りつつ動くのであれば良いのですが、時には、一部の人たちだけで、もしくは行動計画のように人間的な業としてそれらを行っていくことがあるかと思えます。このとき、主なる神の御心・聖霊の業から離れて行っても、計画が見直され修正されることはありません。そうすると、神の教会ではなく、人間の作る教会となってしまいます。ですから教会においてビジョン・計画を話し合う場合、非常に慎重でなければなりません。

教会における一つの決定・目標が決議された時、主の御計画に適うことであれば、当初困難なことかと思われていたことであっても、主は必要を満たし、そしてそのために道を備えてくださいます。だからこそ私たちは、常に御言葉から聞き取り、計画を立てていく・実行していくことが求められるのだと思います。

エズラ記7章に入り、書簡の著者エズラが登場します。アルタクセルクセス王の第7年(BC459)にエズラたちがエルサレムに上ります(7)。神殿が完成したのがダレイオス王の治世第6年(BC517)ですので(6:15)、58年程の年月が経っていることが分かります。

アルタクセルクセス王は、神殿工事の中止を命令していましたが(4:17~23)、エズラを認め、イスラエルの神が礼拝されることを望みました。アルタクセルクセス王がどのような心境の変化があったかということ聖書は語りませんが、エズラの働きかけと共に、主なる神が聖霊をとおして働かれたことを私たちは認めなければなりません(7:27)。

エズラはエルサレムに帰還し、主の律法(=聖書)を研究し実行し、教えることに専念します(10)。このとき律法の代表としての十戒を考えなければなりません。つまり十戒の前文(出エジプト20:3)では、主がイスラエルをエジプトの奴隷から救い出してくださったことを語り、その後律法をお与えくださったことを語ります。律法を守ることを条件に救いが与えられた(律法主義)ではありません。また主イエスは十戒の要約をお語りくださいました(マタイ22:37-40)。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」神への愛、隣人への愛の表れが十戒であり律法です。ですから十戒や律法で、「～ねばならない」と語られていることから、「守らなければならないもの」、「守ることによって救われる」と考えがちですが、そうではありません。愛をもって行動することが求められています。そしてこの教えが律法全体と預言者(=聖書全体)を貫きます。

そしてウェストミンスター大教理問3では、「旧約と新約の聖書が神の言葉であり、信仰と従順の唯一の規範です」と答えます。

エズラが帰還した頃、カナンの原住民・サマリア化した旧北イスラエル王国の人たち、そして最初に帰還したイスラエルの民も罪に汚れていました(参照:9~10章)。彼らは、主なる神を信じているといっても、主の御言葉に聴くことなく、口伝と自分の信仰に生きおり、汚れ偶像崇拜を行っていました。

そうした中、主の語られた御言葉としての律法が与えられ、主による救いの真理、福音が伝えられることは、非常に大切なことでした。宗教改革です。ルター・カルヴァンを初めとする16~17世紀の宗教改革との共通点は、御言葉を取り戻し、御言葉に聴くことを求めたことです。私たちの教会は「改革派教会」と名乗っています。カルヴァンの流れを汲みますが「カルヴァン派」とは名乗りません。常に御言葉に立ち戻り、御言葉に聞き続ける教会、御言葉によって変えられ改革され続ける教会として「改革派教会」と名乗ります。私たちは今改めて主の御言葉に聞き、聞き従うことが求められています。

アルタクセルクセス王は、まだバビロンにいたエズラに対して親書を記し、それをもってエルサレムに帰還すること、エルサレムにおいて神礼拝を行うこと、宗教改革を行うことを求めます(7:11-26)。特に25-26節では、信仰に基づく裁判に関しては、王自らの手で行うことなく、霊的統治者であるエズラに委ねます。これは一般的統治を為政者が行い、霊的統治は教会(小会)が行うことにおいて引き継がれており、為政者が霊的統治・裁判を行ってはなりません。

そして、エズラ自身も、王の親書を、主なる神から与えられた恵みとして受け取り、バビロンを立ち、エルサレムに向かいます(27-28)。そして、主を礼拝し、主がお語りになる律法・御言葉をイスラエルの人々に教え、まさに宗教改革を始めることとなります。

今に生きる私たちも、御言葉から離れ、自分勝手な信仰を行うのではなく、常に主がお語りになる御言葉に聞き続けることが求められています。私たちは改革派教会を建て上げています。このとき培われた伝統を継承することが求められますが、教会が減衰期を迎え、さらにコロナ以後の教会を考えたとき、何も考えることなく以前のシステムを踏襲することは許されません。今の時代、今の日本において改革派教会を建て、信仰を継承を行っていくために、何が求められているのか。私たちは、主がお与えくださった御言葉に聞き続けることが求められています。

アルタクセルクセス王の時代、エズラと共にイスラエル人が帰還します。第二次帰還と言って良いかと思えます。リスト(2-14)はイスラエルの人々には大切な名前ですが、私たちはその意味を理解することはできません。きょうは、「そこには民も祭司もいるのが分かったが、レビ人が見当たらなかった」(15b)の御言葉を手がかりに、今日の教会のあるべき姿を考えて行こうと思えます。

主なる神は最初、レビ族に属する人たちを祭司の家系にしました。その後祭司は、モーセの兄アロンの家系に委ねることとなり、レビ人が直接、祭司の働きを行うことはなくなりました。しかし、祭司を補佐する働きとして、その職務は残り、エジプトから帰還したイスラエルは、各部族に嗣業の土地が与えられましたが、レビ人は各部族の中で勤めを行うために、嗣業の土地が与えられることはなく、各部族の中で生活することが求められました。そのとき、各部族において主に献げられるものをもって、生活の糧を得るものとされていきます。一方、イスラエルの民は、長い間、バビロンでの捕囚の生活の中、限られた形において神礼拝を行うことが求められ、シナゴグにおける礼拝、つまり会堂における礼拝となり、現在の教会における礼拝の原型が整えられていきます。このときシナゴグでは、レビ人たちは与えられた働きを行うことはなく、彼らは自ら手に仕事を持ち、収入を得る生活を行っていました。

エズラは、帰還する民の中に、祭司と共にレビ人がいる必要を求め、共にエルサレムに帰還するレビ人を募集します。旧約の時代のイスラエルでは、預言者・エズラのように聖書を解釈する者が求められます。それに祭司が求められます。祭司は聖所における働き、生け贄などを行うことが中心です。そして祭司の補助をするレビ人がいます。補助者という立場ですが、補助者がいるからこそ、祭司は祭司としての務めを行うことができます。各々に主がお与えくださった働きがあり、携わる者が与えられる必要があります。

祭具類をエルサレムの神殿に責任をもって持ち帰るために、祭司とレビ人たちに託されます(24-30)。主の神殿において用いられるもの、そして新約の時代であれば教会において用いられるものは、適切に管理される必要があります。そのために、祭司とレビ人に責任が担わされました。ちょうど出エジプトの時、幕屋をたたみ、そして次の場所に移るにあたって、祭司がその責任を担うことが求められましたが、同じ働きと言えます。

旅路の間、祭具などを持ち歩けば管理がずさんになります。そのため責任を担う者がなければ、祭具が散逸します。道中は襲ってくる盗賊・敵もあります(31)。そのためレビ人が呼び集められ、そして重要な任務を担うことが求められたのです。そしてレビ人たちは、エルサレム帰還すると、捕囚前に行っていた働きを再開することが求められます。旧約の時代における預言者・祭司・律法の専門家などは、その重要性が分かりますが、レビ人も、主なる神から働きを担った者たちであることを、私たちは忘れてはなりません。

新約の時代、キリストの教会を形成することも同様です。御言葉を解き明かす説教者としての牧師・教師が第一義的に大切です説教により、教会が建つか倒れるかと言われるように、重要な働きです。また牧師と共に治めるために、治会長老が立てられています。旧約における王に位置します。そして祭司の勤めを行っていた愛の業を行うのが執事です。

教会規程の政治規準では、第7章「教会役員の本質」で、第40条(恒常的三職)「教会の政治の全体は、教理・教会統治・愛の業の三つから成っている。キリストは御自身の教会を整えるために、新約時代には、教会に三職を授けられた。すなわち、御言葉と礼典をつかさどる教師の職務・治会長老の職務、及び執事の職務である。これらは教会において恒常的に継続されるべき通常の職務である」と語ります。教派によっては長老・執事を役員など別の名で用いる教会、そしてこれらの働き人を置かない教会もあります。しかし改革派教会では、旧約聖書との継続を意識しつつ、牧師・長老・執事という職務を置きます。

そして教会では、そのほかに教会学校奉仕者、奏楽者、委員会、執事を補助する働き、愛餐会を準備すること等など、様々な奉仕者が求められます。私たちがキリスト教会を形成するためには、牧師・長老・執事だけではなく、任職が求められなくとも、教会の隠れた所で行われる各々の奉仕者が立てられて行くことが求められます。

【祈禱会奨励】「繰り返される罪と悔い改めの薦め」 エズラ9～10章、ウ信仰告白15:2 (8/24)

エズラがバビロンから帰還したとき、すでに第一次帰還したときから70年程の年月を経ています。最初に帰還した人たちは、一人の人のようになって神を礼拝していました(3:1)が、世代が代わり、信仰は異質化していると言って良いかと思えます(9:1b~2)。

日本は、第二次世界大戦を終えてから77年の年月を経ました。平和憲法が与えられ、国民は喜んでいました。しかし今、その憲法が改正されようとしています。世代が代われれば変化もしますが、日本においては、「人の噂も75日」と言われます。政治家たちは、不都合な真実が叫ばれているとき、時が過ぎ去ることを待ちます。

しかし、主なる神は信仰の変質を赦しません。このとき、エズラはぼう然とします(3,4)。預言者・聖書を解き明かす説教者・聖職者といえども、ことの重大性が示されると、言葉を失います。何をすれば良いのか、すぐに答えを出せません。

その後エズラは主の御前に祈り始めます(5-6)。行動を始める前、罪を犯した人たちを追及する前に、主の御前に祈ります。これは何を意味しているかと言えば、罪を犯した者を裁く裁判官になってはならないからです。罪を犯した者を裁くのは主なる神です。だからこそ、同胞の犯した罪を、主の御前に告白することから祈り始めます(6-7)。

続けて主の恵みを感謝します(8~9)。捕囚の民となり、奴隷となっていたにも関わらず、主は異邦人であるペルシャの王たちに好意を抱くようにして、生きる力を与え、エルサレムで神殿を再建することをお許しくださったからです。

そして主の命令を顧みます(11~12)。「御命令は、あなたの僕、預言者たちによってこう伝えられました。『これから入って所有する地は、その地の住民の汚れによって汚された地である。そこは、その端から端まで彼らの忌まわしい行いによって汚れに満たされている。それゆえ、あなたたちの娘を彼らの息子に嫁がせたり、彼らの娘をあなたたちの息子の嫁にしたりしてはならない。あなたたちが強くなり、この地の良い実を食べ、それを永久に子孫の所有とすることを望むならば、彼らと同盟を結ぼうとしてはならない。また、それによる繁栄を決して求めてはならない』と」。主なる神は、出エジプトを果たし、約束の地を前にしたイスラエルに対して、「原住民と結婚してはならない」との命令を発しておりました(申命記7:3)。雑婚を行うことにより、異教の神々が持ち込まれ偶像崇拝を行うこととなること、さらには性的乱れ、姦淫が行われることとなるからです。

これは旧約のイスラエルであることを忘れてはなりません。今日的な考えですと、「なぜ国際結婚がダメなのか」となります。主なる神は、彼らが罪人であり、滅び行く人間であることを知っていました。そして、彼らとイスラエルが交わることにより、イスラエルが罪に汚れ、神から離れていくことを知っていました。イスラエルにとって何よりも重要なことは、主なる神を信じて信仰を継承していくことです。雑婚をすることにより、イスラエルに罪が混入されるのです。だからこそこのときエズラは、同胞の罪を告白し、罪の赦しを願うしかありません。

その上でイスラエル人は行動に出ます。「わたしたちは神に背き、この地の民の中から、異民族の嫁を迎え入れました。しかしながら、今でもイスラエルには希望があります。今、わたしの主の勧めと、神の御命令を畏れ敬う方々の勧めに従ってわたしたちは神と契約を結び、その嫁と嫁の産んだ子をすべて離縁いたします。律法に従って行われますように」(10:2-5)。つまり異邦人の妻を迎えた人々は、罪を悔い改めた上で離縁することを行います。

現代に生きる私たちからすれば、「離縁するまでは」とも思ってしまいます。しかし、罪の根源を断ち切ることが求められます。第一に罪を悔い改めることです(ウエストミンスター信仰告白15:2)。代表者だけではなく、その当事者、そしてイスラエル全体が、同じ思いとなり、主の御前に遯ることが求められます。これは「悔い改める」と宣言することではありません。「自分の罪を深く悲しみ、憎み、それらすべての罪から離れて神に立ち帰り、神の戒めのすべての道において神と共に歩むことを決意する」ことです。

このとき、その姿に表れるだけではなく、行動が伴います。それがイスラエル人にとっては、罪の元凶である異邦人の妻との別れ、関係を断ち切ることでした。罪の悔い改め、遯り、そして行動、これらは主なる神の御前に生きるキリスト者としての信仰の表れです。

